

大阪府河川整備審議会 令和7年度第2回治水専門部会 議事要旨

日 時 : 令和8年1月23日(金曜日) 10:00~11:22

場 所 : 公益社団法人 国民会館 小ホール

出席者 : (部会委員) 川池委員、中北委員、中桐委員、堀委員 (web)

内 容

気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について

- ・気候変動の影響を踏まえたピーク流量の算出方法について、今後論点となる事項や解決に向けた方向性について説明を行い、ご確認いただいた。

概 要 : [以下、○委員 ●事務局]

気候変動を踏まえた治水計画立案の考え方について

○大阪府の管理する河川の特徴である流域面積が小さい河川でのピーク流量の算出方法について、整理されていることに関して異論はない。

気候変動を考慮(1.15倍)する上で、使用する気象データを昭和21年から平成7年をベースとして、2010年以降は既に温暖化の影響を受けているため最近のデータは使わないことは重要なこと。大阪府の降雨強度式から1.15倍した資料を作成しているが、一度d2PDFの2℃上昇とも比較してはどうか。

●d2PDFの雨量データを用いた降雨強度式と、現在の大阪府降雨強度式に1.15倍を乗じた式を比較し、検討する。

○空間分布に関するクラスター分析を進める中で、原因となった気象(台風の進路や低気圧の位置等)を把握しておくことで内容の理解が深まるので確認してみてもどうか。

●降雨波形を整理していく上で、こういった事象による降雨であるか確認を行う。

○今回、RRIモデルを基本的に採用されとのことでご説明いただいたが、資料の流出モデルの比較検討表では重視した項目がどの点であるか分かりにくいためどの点を重視しているか分かるよう資料を修正されてはどうか。

●今回は過去生起していなかった将来発生しうるかもしれない降雨に対する再現性やパラメータ設定の点を重視したため、それらを反映した比較表に修正する。

○流出モデル選定表について、今後は今回選定されたRRIモデルにて河川整備計画や基本方針を検討していくことになる。RRIモデルでは、今後流域治水の観点を見据えた際に、対策施設の組み込みや表現、将来の流域の変化に対応できるというところが一番利点であると思われるため、その観点も入れた比較表とすべきかと思われる。

●上記の点と併せて、コメント頂いた点を踏まえた比較表に修正する。

○流域治水の取組を検討する際に、流域を面的にとらえ、表現する必要があるが、今回検討されたモデルだとRRIモデル以外でそれをするのは難しい。短所の記載について、どのモデルにも必ず課題や問題点があるので、表に整理する上で、モデル間で比較する上での判断材料にはならないような内容については記載する必要は無いと思われる。

○d2PDFのアンサンブル降雨データについて、河川の流域の形状によってはd2PDFの雨量等のデータを持っている点とその河川の流域を代表する点かどうか判断しづらい場合が出てくることが想定される。

○本意見をふまえ、元々d2PDFの出力はグリッドを中心とする5km×5km領域の平均値をとっていることから、流域内に点が含まれる、含まれないに関わらず全てティーセン分割によって降雨波形を抽出するのが良いのではないかな。

- おっしゃるとおり流域の形状や含まれる点に応じて判断する事が難しい場合もあると思われるため、委員お示しの手法で抽出することとする。またそのように資料を修正する。
- より多くの降雨パターンについて検討するのは非常に重要だが、たとえば過去に洪水が生じた際の降雨は「それまでには無かった降雨パターン」という例も多く、年が経つにつれて新しいパターンが積みあがっていく中で、将来起こりうるすべての降雨パターンを想定するのは非現実的なので、ある時点で検討対象とする降雨パターンを決め、一刻も早く整備に向けた取り組みを進めていくことが重要である。そのため、今回の審議を基に一刻も早い整備に向けた検討を進めて頂きたい。